

「小学校教員が望む ALT の役割に関する一考察：
外国語活動における効果的なチームティーチングを目指して」

長田 恵理

本研究は、小学校教員と外国語指導助手(ALT)とのチームティーチング(TT)が効果的に行われるための示唆を得ることを目的としたケーススタディである。

2011 年度より、小学校 5,6 年生に対して外国語活動が必修となった。小学校学習指導要領解説外国語活動編(文部科学省, 2008)では、初等教育や児童を理解する学級担任や外国語活動専科教員が、外国語を使用する場面では ALT などの協力を得て、指導計画の作成や授業の実施を行うことを求めており、Benesse (2011)の調査からも、現在、多くの小学校で学級担任と ALT による TT が取り入れられていることがわかる。一方、上原・フーゲンブーム (2009)が行った教員への質問紙調査では 8 割以上の学級担任が「どちらかという」と或いは「ほとんどすべて」ALT に任せていると答えており、TT が機能していない可能性が指摘されている。TT に関する先行研究は、学級担任や ALT の役割に焦点をあてたもの (井草, 2010; 鬼本, 2006; Aline & Hosoda, 2006)、TT のパートナーに対する教員への意識調査(田邊, 2008, 2010; 上原・フーゲンブーム, 2009)、ALT の英語発話の語彙・統語構造からの分析 (白畑・石黒, 2011)、指導者研修の視点から英語活動に関わる各指導者の役割についての考察 (泉, 2007)などがあるが、授業案や実際の授業観察を通して、ALT の発話内容や小学校教員の認知を分析したものはほとんどない。初等教育のプロであり、学習指導要領解説を熟読した小学校教員が主導する ALT との TT の授業分析から、効果的な TT を行うための教育的示唆を得ることができるのではないかと考えた。

本研究では、小学校教員が ALT と共に 5 年生に対して行った 1 単元計 4 回の授業を録画して書き起こし、談話分析するとともに、授業案と授業前後に行ったインタビューを検証した。小学校教員は教歴 15 年で、東南アジアの日本人学校でも教鞭をとった経験があり、ALT は母国で教員免許を取得した北米出身の 20 代の男性である。調査対象授業は小学校教員が籍を置く公立小学校で行われた。

授業案からは、計画当初から小学校教員が ALT に授業運営面での役割も持たせていることがわかった。例えば「技能面でよかったところをほめる」「発表会の補助をし、代表児童を選ぶ」などである。また、授業観察データを機能ごとにラベル付けした結果、ALT は母語話者としての役割を果たしていた(例: 口の形を見せるなどして発音の見本を示す、リピートさせる際の先導役をする、児童の発話を修正して正しい形で提示する)ほか、小学校教員と会話のモデルを示したり、児童の良い点を褒める場面が多く見られた。さらに、小学校教員へのインタビューの結果からは、特に音声面で、英語母語話者である ALT の意見を尊重して当初の計画を修正するなど授業計画時から ALT が参与していることや、机間巡視、うまく活動できない児童をみつけてケアするなど児童への支援面でも頼りにされていることがうかがわれた。確かに ALT は「存在そのものが教材」で「異文化を伝えられる」人材 (泉, 2007) であり、「音声言語の提供者」「コミュニケーション活動の相手」(鬼本, 2006) であるが、本研究の小学校教員は ALT により多様な役割を担ってもらい、効果的な授業の実施に努めていた。また、円滑に TT を進めていくためには小学校教員自身も ALT と授業内容について話し合うに足るだけの英語力が求められることもわかった。